

町内遺跡発掘調査報告書 1999

—平成11年度試掘調査報告書—

2000. 3

坂 城 町 教 育 委 員 会

例 言

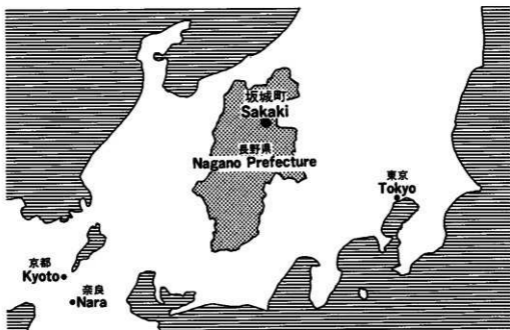
- 1 本書は、長野県埴科郡坂城町における開発事業に伴う、平成11年度の町内遺跡の試掘調査の報告書である。
- 2 調査の費用は、国庫及び県費の補助を得て町費で対応した。
- 3 調査の体制
調査指導者 塩入 秀敏（上田女子短期大学教授、日本考古学協会会員）
担当者 助川 朋広（坂城町教育委員会学芸員）
齋藤 達也（坂城町教育委員会学芸員）
協力者 天田澄子、塚田さゆり（以上、町臨時職員）
白井かね、大柴はつひ、川島和子、小島光子、小林巴、宮入梅子、柳沢敷夫、
山辺ケサエ（以上、更埴地域シルバー人材センター）
- 4 事務局の構成は以下のとおりである。
教育長 大橋 幸文
教育次長 宮原 健一（平成11年7月1日就任生涯学習課長兼務）
生涯学習課長 赤地 利博（平成11年6月30日退任）
文化財係長 池田美智康
文化財係 助川 朋広（前 出）、齋藤 達也（前 出）
朝倉妙子、天田澄子、久保田和江、小宮山秀子、坂巻ケン子、塚田さゆり
（以上、町臨時職員）
- 5 本書の執筆・編集は助川・齋藤が行った。
- 6 本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。

凡 例

- 1 本文中の面積は、開発対象面積と調査面積を記載し、（ ）内に調査面積を記載した。
- 2 挿図の縮尺は、各図ごとに縮尺を示した。

目次

例言	
凡例	
第I章 坂城町の遺跡の立地と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第II章 調査の結果	6
1 保地遺跡II	6
2 中之条遺跡群2	13
3 上町遺跡IV	15
4 上五明条里水田址9	18
5 開敏遺跡III	21
報告書抄録	



長野県埴科郡坂城町位置図

第 I 章 坂城町の遺跡の立地と環境

第 1 節 地理的環境

坂城町は、東信濃と北信濃の接触点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置している。県の東部から北部を貫通する千曲川は、佐久地方を経て上田・小県盆地の北端である千曲川右岸に位置する上田市塩尻の岩鼻と、左岸に位置する半過の岩鼻から、「坂城広谷」と呼ばれる貫通谷である沖積盆地をつくりだしている。そして、坂城町の北側に位置する横吹きの岩壁をかすめて、戸倉・上山田町の沖積地へと続いていく。

坂城町は、南では、両岩鼻が千曲川断層面の岩壁となり、東では、太郎山・鏡台山とを南北に続く山稜が、上田・真田・更埴の市町村界となり、五里ヶ峰から葛尾山、横吹きと自在山の岩壁がネック状となり、屏風のように連なっている。西では、大林山を主峰とする山稜が連続し、上田・上山田・坂井との市町村界となって、一地域を構成している。

右岸地域の坂城・中之条・南条地区と左岸地域である村上地域は、したがって摺り鉢状の盆地形をなす千曲川流域の独立した空間であり、広谷状をなしている。地域の特徴として、右岸地域は、西南する広い斜面と、いくつかの小河川や沢によって、形成された複合扇状地と千曲川沿いの沖積地となり、左岸地域では、千曲川断層面のなす岩壁と小さな沢や岩盤、小複合扇状地となっているため、様相を異にしている。

第 2 節 歴史的環境

坂城町の自然堤防上や小河川によって形成された複合扇状地には、いくつもの遺跡が存在し、遺跡の性格も多種多様である。

旧石器時代では、保地遺跡（3-1）から上ヶ屋型彫刻器や小型の槍先型尖頭器が数点採集されており、これらの遺物より後期旧石器時代に所属する遺跡であるとも考えられている。

縄文時代の遺跡では、込山 A・B 遺跡（30-1・2）から前期・中期の土器などが検出されている。金井遺跡（2-1）からは、中期の勝板式土器や出尻土偶が採集されている。晩期では、保地遺跡（3-1、昭和40年調査）から大洞系、東海系の土器群が出土している。また、込山 E 遺跡（30-5）からは、遮光器土偶の頭部が採集されている。

弥生時代では、中期以前の調査例がなく不明な状態である。後期後半の集落としては、中町遺跡（1-4）、塚田遺跡（1-7、平成4年度調査）、百々目利遺跡（1-3）のように千曲川の中洲上、或いは自然堤防上に位置する遺跡と、保地遺跡（3-1）のように千曲川の段丘上に位置する遺跡、和平方遺跡のような高地性集落の可能性を秘めている遺跡も存在している。

古墳時代の集落址では、寺浦遺跡（8-2）や込山 E 遺跡（30-5）から4世紀代の土器が採

集されているが不明な状況である。後期では、千曲川の自然堤防上と思われる東裏遺跡（1-1）、青木下遺跡Ⅱ（1-8）から土器や祭祀遺物、集落址、祭祀遺構が検出されている。5世紀代に位置づけられる東平古墳の調査（平成5年度長野県埋蔵文化財センター）もある。坂城町の古墳は、未調査例が多く詳細が不明な状況ではあるが、大半が終末期と思われ、河川沿いに立地している傾向が見られる。

左岸に位置する御厨社古墳（47-1）は、石室の規模が千曲川水系最大の古墳である。

奈良時代では、東裏遺跡Ⅱ（1-1）、寺浦遺跡（8-1）、宮上遺跡Ⅱ（8-5）などから集落址の様相がおぼろげながら解明され始めている。生産遺跡としては、土井ノ入窯跡（32）があげられる。

平安時代では、東裏遺跡Ⅱ（1-1）から集落址が検出されている。また、中之条地区の寺浦遺跡（8-1）、宮上遺跡Ⅱ（8-5）などからも同時代の集落址が検出されている。生産遺跡では、青木下遺跡（1-8）、同遺跡Ⅱ、塚田遺跡（1-7）、上五明条里水田址（78）から仁和4年（888年）に起きた千曲川の大洪水の沈殿砂層に、被覆された状態と思われる水田址が検出されている。他には、土井ノ入窯跡（32）の瓦窯があり、9世紀初頭と思われる込山廃寺（54）や上田市信濃国分寺・尼寺や更埴市正法廃寺の差し瓦としての生産が指摘されている。経塚としては、11世紀末に位置づけられる北日名経塚（40）があり、銅製鉄経筒、和鏡、白磁輪花小皿などが出土しているが、現在これらの遺物は、東京国立博物館に所管されている。

中世では、嘉保1（1094）年信濃国更級郡に配流された源盛清が始祖と考えられている。村上氏が国人領主として成長した。戦国時代では武将村上義清が活躍し、東北信地方に勢力をふるった。その村上氏の城館は葛尾山頂に位置する葛尾城（44）であり、その下方にあり現在満泉寺の所在する一帯が村上氏館跡（38）である。葛尾城は天文22（1553）年、武田信玄の攻略により落城したため、現存していない。満泉寺は、天正10（1582）年に村上義清の子景国により、村上氏の先祖代々の菩提寺として建立されたとされている。その他生産遺跡として、開畝製鉄遺跡（53）があり、県内最初の製鉄遺跡の調査遺跡で、製鉄炉址2基が検出され、千曲川の砂鉄を原料としていたことや地元産の褐鉄鉱を使用していた可能性があることが判明している。稼業年代は、村上氏末期であり、鉄の自給の必要性の結果とも考えられている。

近世では、北国街道の制定により、坂木宿や松代藩の私宿である鼠宿がおかれたり、交通の上でも重要な位置を占めていた。坂木・中之条村は、幕府の直割地で天領となったが、天和元（1681）年松代藩預かりになり、さらに天和3（1683）年坂木藩となり、元禄16（1703）年再度天領に戻った経過がある。陣屋は、最初坂木におかれたが、宝暦9（1759）年中野陣屋預かりとなり、その後焼失した事もあり、安永8（1779）年中之条に陣屋が作られたとされている。

以上について触れたわけであるが、古くから多種多様な遺跡が存在している状況がわかる。



発掘調査位置図 (1 : 25000)

第II章 調査の結果

1 保地遺跡II

所在地	坂城町大字南条 字保地2207
事業主体	坂城町土地開発公社
事業名	宅地造成事業
調査期間	平成11年4月21日～ 平成11年9月24日
面積	1900㎡（約504㎡）
担当者	助川 朋広 斎藤 達也



発掘調査位置図

遺跡の環境と経過

保地遺跡は、坂城町南条に所在し、標高428m内外を測る。谷川によって形成された扇状地の扇中部に位置する。分布地図では、縄文～平安時代の集落址に位置づけられ、昭和40年に実施された発掘調査では、縄文時代後・晩期の土器群が出土し、特に晩期前半では、大洞系の土器があり、注目される遺跡となっている。

今回、宅地造成事業が計画され、遺跡の破壊が余儀なくされたため、試掘調査を実施し、遺跡の状況を確認することとなった。

調査結果

開発対象地に合計3本のトレンチを



1号トレンチ検出状況（東より）



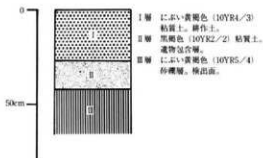
2号トレンチ検出状況（西より）

設け、遺構の存在の有無を確認した。開発対象地は、昭和40年の発掘調査地点の隣接地であったため、多くの出土遺物があること、同様な遺跡の性格が予想された。

調査の結果、耕作土直下の第II層は遺物包含層で、多量の出土遺物があった。第III層は、にぶい黄褐色を呈する砂礫層の地山で、遺構検出面となることが判断された。第II層は調査区の西側が厚く堆積することが観察された。

調査は、遺構同士の重複関係が激しく、遺構プランを把握できないものが多いほか、多量の縄文土器の出土が、他の時代の遺構中に含有されるため、所属時期の判断を困難にさせた。

検出された遺構は、縄文時代～平安時代に所属するもので、縄文時代と思われるものには、土壇址等がある。古代では、竪穴住居址等があった。出土遺物では、縄文中期末から晩期の土器・石器の他、土師器・須恵器があった。縄文時代晩期前半に主体があったと考えられていた本遺跡であったが、今回の調査によって、後期後半や晩期後半の土器が多いことが判明した意義は高い。また、後期と思われる土壇址（墓址）の検出は遺跡の性格を知るためには重要な発見であった。調査の結果、宅地の区画にあたっては盛土する事によって、遺跡を保護することとし、進入路を中心とした約200㎡の発掘調査を実施することとなった。



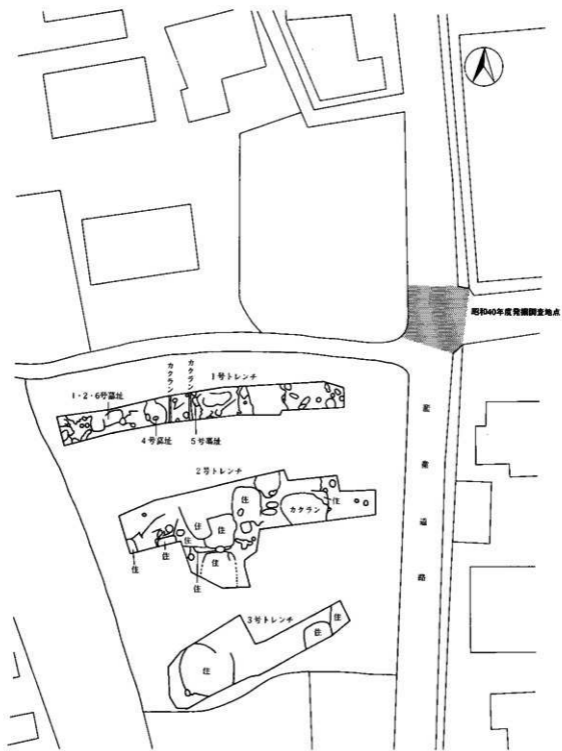
基本層序模式図



1号墓址検出状況 (北より)



6号墓址人骨出土状況 (西より)



発掘トレンチ設定図 (1 : 500)

縄文時代の遺物（1～88）

先述のとおり本遺跡からは、縄文時代後期から晩期の土器・石器をはじめとする遺物が多量に出土した。それらの詳細については発掘調査報告で述べることにし、今回は代表的な遺物を選んで図示した。土器等は各トレンチ毎に、石器は3つのトレンチの中でも特に出土量が多かった2号トレンチ出土の石器を示した。

1号トレンチの縄文時代の土器（1～45）は、縄文時代後期初頭から晩期後葉に属するものが出土しており、出土量的には晩期より後期の土器のほうが多い。1～30は縄文時代後期に属するものであるが、後期の初頭に位置付けられるものは少なく、後期中葉から後葉に位置付けられるものが多い。31～42は縄文時代晩期の土器であるが、昭和40年度の調査（関1966）において出土した晩期の土器は出土せず、晩期後半に属するものが多い。43～45は土製円板である。土製円板は、他のトレンチより出土量が多い。

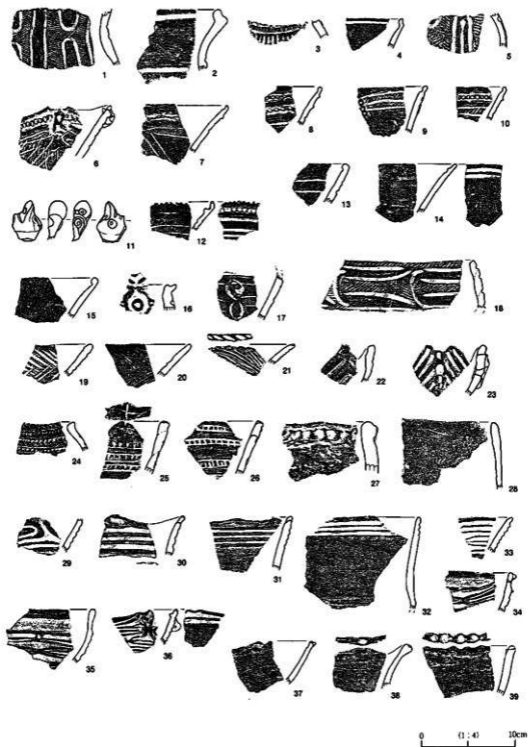
2号トレンチ（46～74）からは縄文時代中期末から晩期後葉の土器が出土しているが、中期末に位置付けられる土器は46のみであり、それ以外は出土していない。47～52は縄文時代後期のものであるが、2号トレンチにおいては出土量は少ない。このトレンチでもっとも多いのは晩期の土器（53～71）で、そのなかでも後葉のもの（55～62）が多い。しかし、2号トレンチでは、他のトレンチでは出土しなかった晩期中葉に属する大洞系の土器（68～71）が見られることは注目される。土製円板（72）も出土しているが、先述のように1号トレンチより出土量は少ない。73は耳飾り、74は、土偶の脚部である。耳飾りと土偶は図示したもののみの出土である。

3号トレンチ（75～82）では、後期（75～78）から晩期（79～81）の土器と土製円板（82）等が出土しているが、縄文時代の遺物は1号・2号トレンチに比べ、非常に少ない。

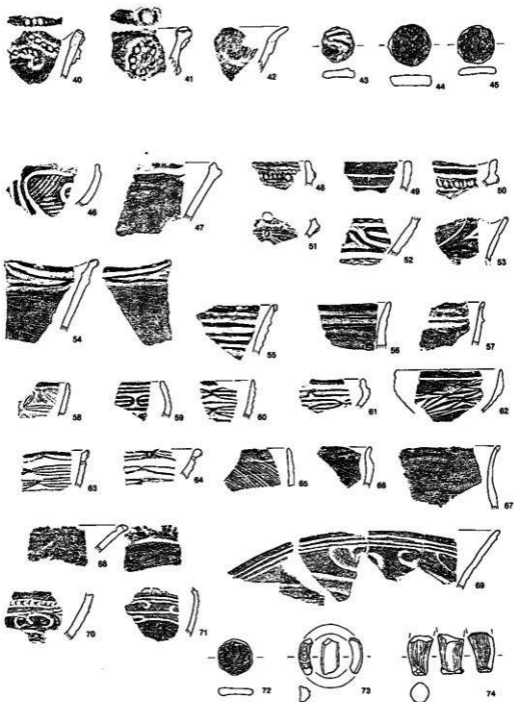
石器（83～88）は各トレンチから出土しているが、先述のように2号トレンチから特に多く出土し、3号トレンチからの出土は少ない。中でも石鏃（84・85）は1号・2号トレンチを通じて非常に多く出土し、形態の上から有茎（84）と無茎（85）のものに大別できる。本遺跡出土の石器は石鏃のほかに、礫石（87）・石皿（88）・磨石・石錐・打製石斧・磨製石斧（86）など多様な石器が出土している。また、所属時期は不明であるが小玉（83）も1点出土している。

以上、各トレンチの土器と石器について略述したが、土器を見ると1号トレンチでは後期中葉の土器が晩期の土器より多く、2号トレンチでは晩期後葉の土器がより多いなど、トレンチによって出土土器の内容にやや差異が存在していることが指摘できる。試掘調査ということもあり、本遺跡における縄文時代の遺構・遺物については不明な点も多いが、そういったトレンチごとの土器内容の違いが、本遺跡内における該期の遺構の継続期間等に関わっているものと思われる。

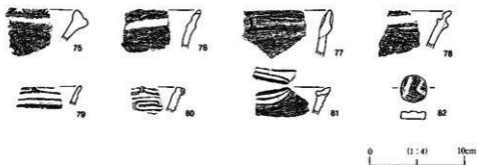
参考文献：関 孝一 1966「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』第51巻第3号



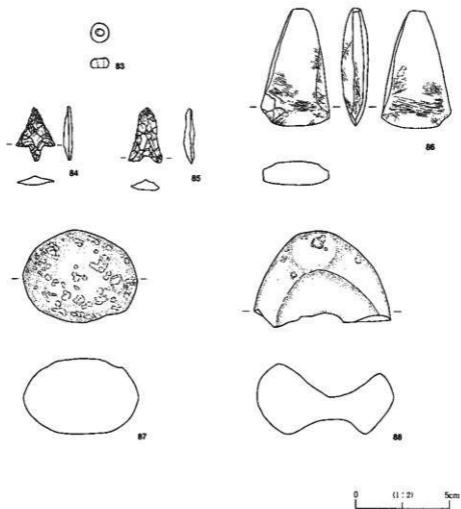
1号トレンチ出土土器実測図・拓影



1号トレンチ (40~45)、2号トレンチ (46~74) 出土遺物実測図・拓影



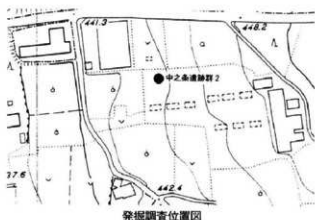
3号トレンチ出土遺物実測図・拓影



2号トレンチ出土石器実測図

2 中之条遺跡群 2

所在地	坂城町大字中之条 字山口1462-1他
事業主体	緑川興一
事業名	配送センター建設事業
調査期間	平成11年5月10日～ 平成11年5月11日
面積	2337㎡ (311㎡)
担当者	助川 朋広



発掘調査位置図

遺跡の環境と経過

中之条遺跡群は、坂城町中之条に所在し、標高460m内外を潤る御堂川によって形成された扇状地の扇尖部に位置する。分布地図によると縄文～平安時代の集落地に位置づけられている。

今回、緑川興一氏が行う配送センター建設が計画され、遺跡の状況を確認する必要が生じたため、試掘調査を行うこととなった。

調査結果

本遺跡において、近年の開発による発掘調査件数が増えてきているが、本遺跡の遺構の状況は、まだ不明な部分が多いといえる。今回の対象地付近は、遺構が集中するといった状況ではなく、どちらかといえば、散漫な状況ではないかとも予想される地域である。

試掘調査は、調査対象地に耕作によ



1号トレンチ検出状況 (南より)

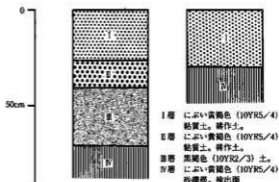


3号トレンチ完掘状況 (北より)

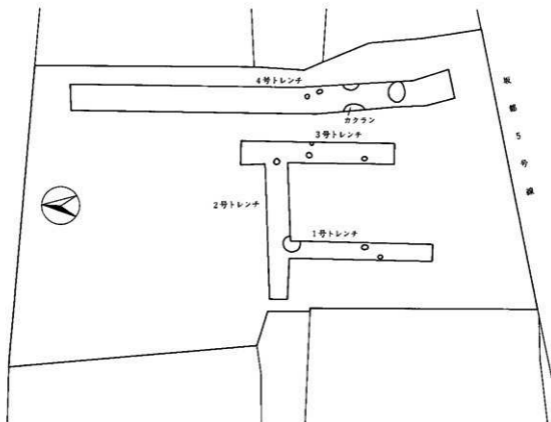
り南北方向のトレンチを設定する事を余儀なくされ、一部東西方向にも設定した。総数4箇所のトレンチによって遺構を検出する事とした。

検出された遺構は、ピット及び土坑状の落ち込みであり、ピットが8基、土坑址が3基と思われる。各遺構は、第IV層のぶい黄褐色土から検出され、地表面から30～60cmの深度である。

遺構の密度は当初の予想どおり、比較的散漫な状況であり、周辺も同様な様相が予想できる。今回の試掘調査によって、対象地は散漫な状況ではあったが、遺跡が存在することが判明したため、協議した結果、開発計画は一時中断した。



基本土層模式図



発掘トレンチ設定図 (1 : 500)

3 上町遺跡Ⅳ

所在地	坂城町大字中之条 字上町1332-3他
事業主体	坂城町都市開発課
事業名	都市計画街路事業
調査期間	平成11年5月27日～ 平成11年5月29日
面積	1936㎡(49㎡)
担当者	助川 朋広



遺跡の環境と経過

上町遺跡は、坂城町中之条に所在し、御堂川によって形成された扇状地の扇中央部に位置し、標高430m内外を測る。本遺跡は中之条遺跡群に統括される遺跡である。分布地図によると縄文～平安時代の集落址とされている。本遺跡周辺では、平成6～7年度に実施された通称坂城インター線や消防分署の建設に伴う発掘調査によって、古墳時代後期～平安時代を主体とした集落址であることが判明している。中でも大型の掘立柱建物址が集中していることから、郷家あるいは、豪族居館の存在も考えられる遺跡である。

今回、坂城町都市開発課による都市計画街路事業が計画され、遺跡の破壊が余儀なくされ、遺跡の状況を確認する事を目的として、試掘調査を実施することとなった。



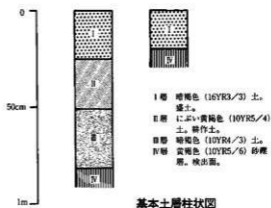
TP1検出状況 (南より)



TP3検出状況 (北より)

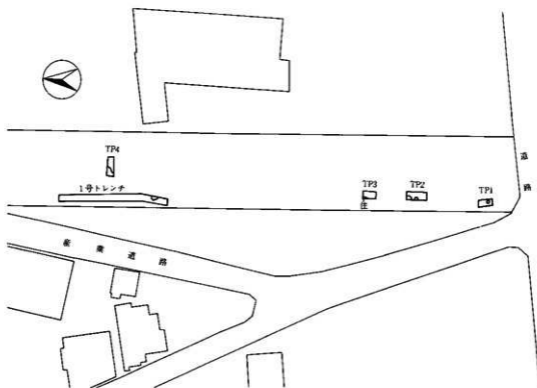
調査結果

試掘調査は、道路建設予定地を対象として、用地買収の終了した地域にて行った。4箇所の試掘坑と1箇所のトレンチにより、遺跡の状況を確認した。試掘坑の設定は、道路建設の対象地の歩道部分として遺構がどの深さから検

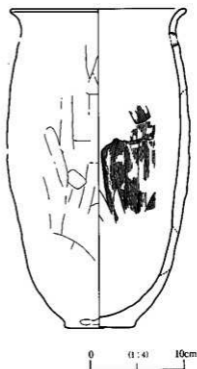


出されるかを観察する事に主眼を置いたため、対象地の西側に集中している。トレンチの設定も同様である。遺構は、第IV層の黄褐色砂礫層で検出され、対象地が西側に傾斜しているが、盛土が実施されているところも存在しているため、検出レベルは異なる。

調査の結果、TP3から竪穴住居址の検出があり、TP2・3からは、ピットの検出があった。また、北側に設定した1号トレンチやTP4からもピット状の落ち込みが検出され、遺跡であることが判明した。



試掘調査の実施できる場所が限られていたため、部分的な調査となったが、対象地は当初の予想どおり竪穴住居址が検出され、集落址である事が判明した。遺構の検出レベルは、開発対象地内において削平を受けていたTP1からTP3の周辺や、1号トレンチ南側では約20cmと浅い状況であったことが判明するなど当初の目的を十分果たすことができたと考えられる。今後の遺跡の保護措置としては、本線部分は記録保存を前提とした発掘調査を実施する事が必要であり、記録保存のための発掘調査を実施する事と決定した。なお、本線の西側に設置される歩道部分については盛土を行い、掘削による遺跡の破壊のないよう計画変更を行うことに決定した。したがって、開発対象地内の本線部分及び破壊を余儀なくされた歩道部分については、記録保存を前提とした発掘調査を実施し、盛土による遺跡保護が可能な範囲は、発掘調査を実施しないことと決定した。



出土土器実測図

出土遺物

TP3から出土した土師器である。住居址の東壁付近の覆土中より、出土したものと考えられる。この出土遺物から住居址の所属年代を求めるのは難しいが、古墳時代後期から奈良時代の住居址と考えられようか。

4 上五明条里水田址 9

所在地 坂城町大字上五明
字旅屋場651他
事業主体 長野県更地建設事務所
事業名 緊急地方道路整備事業
調査期間 平成12年7月9日～
平成12年7月13日
面積 1099㎡ (60㎡)
担当者 助川 朋広



遺跡の環境と経過

上五明条里水田址は、坂城町上五明、網掛、上平に所在する千曲川の沖積地の標高401m内外に位置している。分布地図によると平安時代～近世の条里水田址とされ、同遺跡内にて発掘調査が3度、試掘調査が4度実施されている。

平成6年度に実施された上平地区の発掘調査では、自在山の麓近くまで、仁和4(888)年に起きたとされる千曲川の大洪水の際の氾濫沈澱砂層によって、被覆されたと思われる水田址が検出されている。平成8・9年度には、今回と同様に、緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査が実施され、一部であるが、仁和の大洪水の氾濫沈澱砂層によって、被覆されたと思われる平安時代の水田層が検出されている。また、9年度の調査では、さらに西側の調査



となったため、水田址の検出できるところと、水田址が存在せず平安時代の住居址が検出できる部分とに分かれていくことが判明した。

今回、長野県更埴建設事務所の継続事業である、緊急地方道路整備事業によって、遺跡の破壊が余儀なくされたため、試掘調査を実施し、遺跡の範囲・性格を確認することとなった。

調査結果

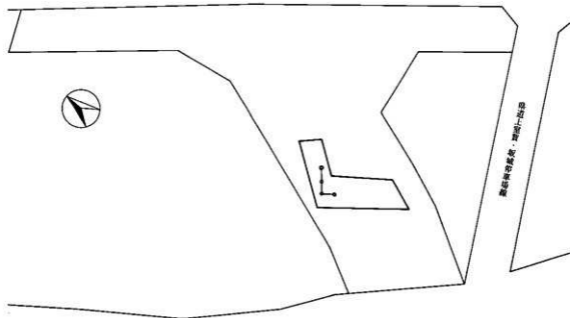
調査対象地は、道路新設となる旧

JAちくま農業協同組合の跡地で、遺跡の検出面は、非常に深いと予想されるところである。調査対象地内のトレンチは、掘削によって生じる排土を考慮し、L字状に設定した。今回の試掘調査の目的は、平成9年度に発掘調査を実施した1区で検出された平安時代の集落址の状況と、隣



基本土層模式図

国道10号・稲荷山線



トレンチ設定図 (1:500)

5 開畝遺跡Ⅲ

所在地	坂城町大字中之条 字開畝2443-1
事業主体	柳沢 健司
事業名	店舗建設事業
調査期間	平成11年9月16日～ 平成11年9月17日
面積	1284㎡ (653㎡)
担当者	助川 朋広



発掘調査位置図

遺跡の環境と経過

開畝遺跡は、坂城町中之条に所在し、御堂川によって形成された扇状地の扇中央部に位置し、標高430m内外を測る。分布地図によると弥生～平安時代の集落址とされ、平成4年に長野県埋蔵文化財センターが実施した調査では、古代の集落址と中世の土坑址が検出されている。平成5年に実施した隣接地の発掘調査では、古代の集落址が判明している。また、遺跡の東には、昭和52・53年に長野県下初の製鉄遺跡の学術調査が実施された開畝製鉄遺跡がある。調査の結果、製錬が2基が検出され、千曲川の砂鉄を使用した鉄生産が、中世末に行われていた可能性が指摘されている。

今回、柳沢健司氏が行う店舗建設事業が計画され、遺跡の破壊が余儀なくされたため、試掘調査を実施し、遺跡



試掘トレンチ近景 (南西より)



1号トレンチ遺構検出状況 (東より)

の状況を確認することとなった。

調査結果

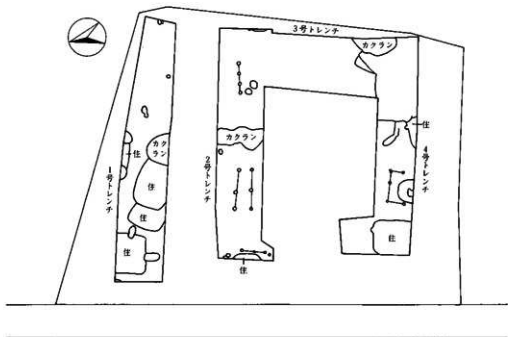
開発対象地に3箇所のトレンチを設定し、遺跡の有無の確認を行った。遺構の検出は、第III層の黄褐色砂礫層で行った。検出面は、地表下約30cmであった。遺構は、各トレンチから検出され、竪穴住居址や掘立柱建物址と思わ

れるピットなどが検出された。調査の結果、対象地内には遺跡が存在することが判明した。

当初の計画では対象地すべてを削平し、店舗を建設する計画であったが、削平箇所を少なくする事によって、遺跡を保存することを原則とし、破壊を余儀なくされた部分のみ記録保存する事となった。発掘調査対象面積は、約300㎡である。



基本土層模式図



試掘トレンチ

試掘トレンチ設定図 (1:500)

報告書抄録

ふりがな	ちょうないいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	町内遺跡発掘調査報告書 1999						
副書名	平成11年度試掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第15集						
編著者名	助川朋広・齋藤達也						
編集機関	坂城町教育委員会						
所在地	〒389-0602 長野県埴科郡坂城町大字中之条2468 TEL0268-82-2069						
発行年月日	2000年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ほのじ 遺跡 II	埴科郡坂城町 大字南条	1521	36° 26' 10"	138° 11' 51"	1999年4月21日 ～ 1999年9月24日	504	宅地造成
なかのじょう 遺 跡群2	埴科郡坂城町 大字中之条	1521	36° 26' 35"	138° 11' 59"	1999年5月10日 ～ 1999年5月11日	311	配送センタ ー建設
うのまち 遺跡 IV	埴科郡坂城町 大字中之条	1521	36° 26' 35"	138° 11' 52"	1999年5月27日 ～ 1999年5月29日	49	都市計画街 路事業
かご 上五明条 水田址9	埴科郡坂城町 大字上五明	1521	36° 26' 45"	138° 10' 20"	1999年7月9日 ～ 1999年7月13日	60	緊急地方道 路整備事業
ひらけ 開敏遺跡 III	埴科郡坂城町 大字中之条	1521	36° 26' 54"	138° 11' 52"	1999年9月16日 ～ 1999年9月17日	653	店舗建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
保地遺跡II	集落址	縄文～平安	住居址、土坑址	縄文土器、土師器	試掘調査		
中之条遺跡群2	集落址	古墳～平安?	土坑址	なし	試掘調査		
上町遺跡IV	集落址	古墳～平安	住居址	土師器	試掘調査		
上五明条水田址9	集落址?	平安～中世	竪立柱建物址?	須恵器	試掘調査		
開敏遺跡III	集落址	奈良～平安	住居址ほか	土師器	試掘調査		

坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書

	【開敏製鉄遺跡—第1次調査報告書】	1977
	【開敏製鉄遺跡—第2次調査報告書】	1978
	【東裏遺跡】	1983
	【中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅱ】(概報)	1993
	【南条遺跡群 塚田遺跡】	1993
第1集	【南条遺跡群 東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡】	1994
第2集	【町内遺跡発掘調査報告書】	1994
第3集	【町内遺跡発掘調査報告書】	1995
第4集	【南条遺跡群 塚田遺跡Ⅱ】	1995
第5集	【豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡】	1996
第6集	【中之条遺跡群 寺浦遺跡Ⅱ】	1996
第7集	【中之条遺跡群 上町遺跡Ⅱ】	1996
第8集	【上五明条里水田址】	1996
第9集	【町内遺跡発掘調査報告書 1995】	1996
第10集	【坂城町試掘調査・立会い調査報告書】	1996
第11集	【町内遺跡発掘調査報告書 1996】	1997
第12集	【戌久保遺跡・町横尾遺跡】	1998
第13集	【込山B遺跡ほか 発掘調査報告書 1997】	1998
第14集	【町内遺跡発掘調査報告書 1998】	1999
第15集	【町内遺跡発掘調査報告書 1999】(本書)	2000

発行日 2000年3月24日

編集者 坂城町教育委員会

発行者 坂城町教育委員会

〒389-0602 長野県埴科郡坂城町大字中之条2,468番地

TEL 0268(82)2069

印刷者 信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037 長野市西和出470

TEL 026(243)2105